

平成 27 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

総合学科の特性を活かして地域のニーズや変化する社会の要請に応える教育活動を展開し、地域や次代を支えリードする人材を育成する。

- 多様な学びを通して能力・適性を伸ばし、自らの将来を展望し見通すことができる生徒を育成する。
- 激変する社会の中にあっても、自らを失うことなく新しい社会を支えリードしていくことのできる「自主、自律、創造」の力を持った人材を育成する。
- 本校で身につけた力や経験に自信と誇りを持ち、培った友情をも背景として様々な困難に立ち向かっていく「人」を育てる。
- 上記の取組に際し、学校、地域における教育資源と社会資源の相互活用を図るため、開かれた学校づくりをより一層推進する。

2 中期的目標

1 確かな学力への取組み

- 学習指導要領を踏まえ、「わかる授業、学力がつく授業、進路に結果をだす授業」をめざした取組を進める。

ア 総合学科の特性を活かした教育課程の編成を行うとともに、基礎基本の学力の定着をめざして授業改善に取り組む。

イ ピオトープなどの校内教育資源とともに、福祉施設や近隣の学校園など校外の教育資源を適宜活用し、「感性が磨かれる授業、実社会との関わりを実感するような授業」をめざした取組を行う。

ウ 団塊の世代の大量退職、大量採用時代を睨み、これまでに蓄積してきた授業実践の成果を継承しつつ、ICT 機器を活用するなど授業に新風を吹き込む取組を行う。

*学校教育自己診断（生徒）における「わかりやすく楽しい授業」の肯定率を、H29 には 65%以上をめざす。（H26 49%）

2 キャリア教育、人権教育の推進

- キャリア教育、人権教育を系統的、積極的に推進し、単なる卒業後の進路を決めるのではなく、将来、職業人・社会人としてよりよく自己を活かして生きていくための基盤となる能力や態度を育成する。

ア 総合学科必修科目である「産業社会と人間」をはじめ、「総合的な学習の時間」、LHR 等を活用して、キャリア教育、人権教育、「志学」を総合的・融合的に行う。

イ 総合学科の特性を活かし、“量”より“質”の希望進路の実現を図り、進路未決定者の減少に向けて鋭意取り組む。

ウ 進学希望者が増加していることから、希望実現のための学習支援、学習環境の整備に努める。

エ 生徒の学習歴の多様化を踏まえ、小中学校でのキャリア教育、人権教育の状況を把握し、小中学校と連携した取組を一層推進する。

オ 自立支援コース生徒の進路実現に向け、校内サポートを充実させるとともに関係諸機関と連携し就労に向けた取組を多面的に行う。

カ 人権教育、支援教育のスキルを伝承し、後継者を育成していく。

*H27に進路未定率 5%を達成し、さらなる縮小をめざす。（H26 7%）

3 教育相談体制の充実

- 生徒理解の促進と相談体制を充実し、課題解決に向けては関係諸機関と連携し機動的な対応を図る。

ア 個々の生徒が置かれている状況を的確に把握するため、生徒・保護者との面談を丁寧に行い、生徒・保護者との信頼関係に基づいた教育活動を展開する。

イ 中学校との連携を深め、情報の交換に努めるとともに、中学生に対して Web ページを活用して本校での高校生活を具体的にイメージできるよう発信していく。

ウ 相談事案は教育相談係や学年連絡会で集約し、本人の希望を大切にしながら情報の共有化を図り学校全体で支えていく体制を充実させる。その際、スクールカウンセラーを積極的に活用する。

*学校教育自己診断（生徒）における「悩みや相談に親身なって応じてくれる先生がいる」の肯定率を、H29 には 65%以上をめざす。（H26 52%）

4 教育活動全般を通して「自主・自律・創造」の力を育成するとともに、「繋がることの大切さ、チームの力強さ」を実感させる。

- 多様な学びを通して身に付けた能力を最大限に発揮し、自律的自発的に活動し、自らの才能を開花させる環境を整える。

ア 総合学科のシステムにありがちな固定集団としての活動の少なさをカバーするため、学校行事や部活動を通して、集団としてのまとまりや縦横の連帯感から生じる新たな力や喜びを感じさせ、集団活動での味わえる成就感・達成感を体験させる。

*部活動加入率を、H29 には 55%以上をめざす。（H26 43%）

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 27 年 12 月実施分]	学校協議会からの意見
<p>保護者の回収率が昨年よりもアップ（76%→80%）し、20 問中 17 問において肯定率が昨年を上回った。生徒は、28 問中 11 問において昨を下回り、これまで年次が進むにつれ肯定率が高くなる傾向がみられたが、今年度は 2 年次が最も低い問が 17 問もあった。一方、1 年次は「学校へ行くのが楽しい」が 76%で昨年を 10%上回るなど、昨年の 1 年次より総じて高い傾向がみられた。</p> <p>【学習指導】 「先生はプロジェクターなどを使って説明してくれることが多い（生徒）」は 45%→73%に、「教え方を工夫している先生が多い（生徒）」は 54%→64%に増加したが、「わかりやすく楽しい授業（生徒）」は 47%に止まった。ICT 機器をさらに効果的に活用し、授業改善にいかに取り組んでいくのが課題である。</p> <p>【生徒指導】 「生徒指導の方針に共感できる（保護者）」は 3%アップし 68%になったのに対し、「先生の指導に納得できる（生徒）」は 45%に止まっている。一方、「担任以外で気軽に相談できる先生がいる（生徒）」は 8%増加し 47%になった。「厳しく寄り添う」指導で、生徒理解・信頼を得ていきたい。</p> <p>【学校運営】 「各種会議が教職員間の意思疎通や意見交換の場として有効に機能している（教職員）」は 53%に止まっている。会議は時間的制約も大きいので、職員室や準備室が、日常的に気軽に授業や生徒指導について相談できる場となるよう一層、努めていきたい。</p>	<p>第 1 回（4 月 23 日） ○授業見学 ・「産業社会と人間」－1 年は始まったばかりなのに、クラスが打ち解けていた。コミュニケーション力を身に付ける取組に興味をもった。 ○H27 学校経営計画について ・ICT 機器の整備計画や、多様な学習成果の評価手法に関する調査研究協力校になるなど、学校は進化している。入試制度の改変を機に、新たな再スタートの意気込みを感じた。 ・総合学科の特色を中学校の教員が案外知らないのでは、伝えてほしい。</p> <p>第 2 回（10 月 15 日） ○H27 学校経営計画、進捗状況について ・若い先生が課題としていることを、授業交流でベテランの先生から学べているのは良い。 ・自立支援コースの生徒の進路開拓に一生懸命取り組んでくれていることがわかった。共生、多文化の教育をさらに推し進めていってもらいたい。 ○施設見学－新設された ICT 機器を使ったモデル授業を体験していただく。 ・これだけの設備を整えている学校はまだ少ない。広報でもしっかりアピールしてほしい。</p> <p>第 3 回（1 月 28 日） ○H27 学校経営計画、自己評価について ・多様な取組みがなされているが、普通科でも 1 年時より選択科目が導入されるなど、違いが分かりにくくなっている。入試制度も変更されるので、総合学科の特色をより明確に示し、十分に伝わるよう発信していく必要がある。</p>

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 確かな学力の育成	(1)「わかる授業、学力がつく授業、進路に結果を出す授業」をめざした取組を進める。 ア 総合学科の特性を活かしつつ生徒の実態を踏まえた授業改善に取組み、基礎基本の学力の定着を図る。 イ 学校内外の教育資源を適宜活用し、「感性が磨かれる授業、実社会との関わりを実感するような授業」をめざした取組みを進める。 ウ これまでに蓄積してきた授業実践の成果を継承しつつ、ICT機器を活用するなど授業に新風を吹き込む取組を進め、授業力の向上に努める。	○ 多様な選択科目の開講、少人数展開授業を行い、基礎基本の定着を図るとともに、進路希望に応じたきめ細かな指導を行い、進路実現につなげていく。 ○ 農場、ビオトープなどの本校独自の教育環境を活用するとともに、地域社会をフィールドとした新たな学びを創出する。 ○ 校内授業公開週間を設け、教科の枠を超えたベテラン教員と初任者等の授業交流を積極的に行い、ベテランの指導方法のノウハウを継承するとともに、若手の持つ最新の知識やスキルを交換し、学校全体の授業力の向上をめざす。 ○ ICT機器活用環境の整備を図る。 ○ 授業アンケートの結果を踏まえ、教材の精選・工夫を行う。 ○ 他校種と連携して、授業改善に積極的に取組む。	○自己診断(生徒)の「わかりやすい授業」49%を55%以上に。 ○地元学校園、施設との交流の成果物 ○公開授業週間を年2回(6・11月)設け、研究授業も実施。 ○ICT機器の活用頻度等 ・ICTを活用した授業力向上研修を3回実施。 ・自己診断(教職員)の「教員がICT機器を活用している授業が多い」46%を55%に。 ○自己診断(生徒)の「教え方に工夫をしている先生が多い」54%を60%以上に。 ○地元の小中学校と連携し、授業見学と意見交換会を2回実施。	○自己診断(生徒)肯定率は47%に止まるが、授業アンケートは8項目で昨年よりもアップ(△) ○農場での幼稚園児との交流が地元紙に取り上げられた。水辺の環境フォーラムを開催、ビオトープも活用された(○) ○公開授業週間を年2回、初任者6人の研究授業、外部講師による2回の授業力向上研修を実施(○) ○・10年研と連動し、ICTスキルアップ研修を4回実施(○) ・自己診断(教職員)ICT活用は82%に(◎) ○自己診断(生徒)64%に(◎) ○地元の中学校2校と授業交流を、本校のICT機器を活用し、中学校教員を招いて合同研修を実施。計3回交流実施(○)
2 キャリア教育、人権教育の推進と教育相談体制の充実	(1) キャリア教育、人権教育を系統的、積極的に推進する。 ア 「産業社会と人間」、「総合的な学習の時間」、LHR等を活用して、キャリア教育、人権教育、「志学」を総合的・融合的に行う。 イ 総合学科の特性を活かし、“量”より“質”の希望進路の実現を図り、進路未決定者の減少に向けて鋭意取り組む。 ウ 生徒の学習歴の多様化を踏まえ、小中学校でのキャリア教育、人権教育の状況の把握に努める。 エ 自立支援コースの生徒の進路実現に向けて取組を進める。 (2) 教育相談体制を充実させる。	○ H25作成の「貝高キャリア教育」の冊子を活用し、本校のキャリア教育の実践を継承していく。 ○ 同一の進路目標を持つ生徒同士で高めあう集団づくりに取り組む。 ○ 進学希望生徒の増加を踏まえ、自学自習できる学習環境の整備に努める。 ○ 小中学校と連携し、生徒・教職員の交流を積極的にすすめる。 ○ 自立支援コース生徒の進路実現に向け、校内サポートを充実させるとともに、本人・保護者の意向を踏まえ、府教育委員会、地元職業安定所など関係諸機関とも連携し就労に向けた取組を多面的に行う。 ○ 年次団会議等で生徒の情報交換を密にし、「厳しく寄り添う指導」に取り組む。 ○ 「高校生活支援カード」を積極的に活用していく。 ○ 教育相談室の整備に努める。	○自己診断(生徒)「自分の考えをまとめたり、発表することがよくある」58%を60%以上に。 ○希望進路の実現率等 ・大学・短大進学者数を1.2倍増に(H26 68人) ・看護希望者の希望実現率を85%以上に(H26 83%) ・看護希望者の合格に至るまでの受験回数平均2.2回以下を堅持 ・就職一次合格率、二次以降合格率ともに70%以上を堅持 ・進路未定率を5%以下に。 ○小中学校とのキャリア教育・人権教育に関する交流を2回実施。 ○自立支援コース生の希望進路の実現。 ○自己診断(生徒)「先生の指導に納得できる」43%を50%に ○自己診断(生徒)「悩みや相談に親身になって応じてくれる先生がいる」52%を55%以上に。	○自己診断(生徒)58%に止まる(△) ○・大学・短大進学者数は昨年比1.4倍増に(96人)(◎) ・看護希望者の希望実現率は84%(△)、合格に至るまでの受験回数平均は1.6回に。看護短大に2名合格。(○) ・就職一次合格率は94%、2次も88%と好調(◎) ・進路未定率は6.5%(△) ○地元の中学校の進路学習に本校教員を講師として派遣。本校で小中学校の教員参加のもと人権研修を、また、生徒主体の人権フォーラムを開催。計3回交流実施(○) ○自立支援の「進路のてびき」を改訂。自立支援コース3年次生の進路先は内定(○) ○自己診断(生徒)「先生の指導に納得できる」45%に止まる(△) ○自己診断(生徒)「親身に相談にに応じてくれる先生がいる」55%に(○)
3 「自主・自律・創造」力を育成し、繋がることの大切さ等を実感させる。	(1) 多様な学びを通して身につけた能力を最大限に発揮し、自律的自発的に活動し、自らの才能を開花させる環境を整える。 ア 総合学科のシステムにありがちな固定集団としての活動の少なさをカバーするため、学校行事や部活動を通して、集団としてのまとまりや縦横の連帯感から生じる新たな力や喜びを感じさせ、集団活動でのみ味わえる成就感・達成感を体験させる。 イ 他校種や地域との連携を深めるとともに学校情報の積極的な発信を行う。	○ 修学旅行をはじめ、学校内外で多くの感動を体験させ、自己肯定感を高める取組を推進する。 ○ 多様な学びを通して身につけた能力を最大限に発揮し、自律的自発的に活動し、自らの才能を開花させる環境を整える。 ○ 生徒の新たな活動拠点となるよう中庭の整備を進める。 ○ 授業においても、探究活動や発表活動を積極的に行い、それぞれの気づきや学びに基づいた自主的活動を促進し、互いに発表しあうことでコミュニケーション能力を高める。 ○ 集団活動の少なさをカバーするため、体育祭、文化祭等の行事に工夫を凝らし、クラスのまとまり、単なる「仲良しクラブ」ではない仲間づくりを進める。 ○ 仲間づくり、自律的な成長に部活動の果たす役割は重要との認識のもと、生徒の主体的な意見を取り入れて、部活動の活性化、新入生の加入率を上げる取組を行う。 ○ 生徒がかかわることにより、広報活動の活性化を図る。	○海外修学旅行(台湾)の生徒満足度75%以上に。 ○総合学科アンケート「コミュニケーション能力が身に付いた」77%を80%以上に ○自己診断(生徒)の行事満足度60%を65%以上に。 ○部活動の加入率1年次39%を45%以上に。 ○中高の部活動交流の実施クラブ数を増加させる。(4→6部)。 ○Webページで、“生徒の活動の見える化”に取り組む、月1回以上更新する。 ○生徒が作成した広報活動の成果物。	○台湾修学旅行生徒満足度は59%に止まる(△)。ただし、学校交流の満足度は84%、B&S自主研修は89%に達した(○) ○総合学科アンケート「コミュニケーション能力が身に付いた」は72%に止まる(△) ○自己診断(生徒)行事満足度は64%に止まる(△)。文化祭のオープニング行事「とても良かった」は84%に(○) ○部活動加入率は、1年40%、全体42%に止まる(△) ○中高の部活動交流実施クラブ数は5部に止まる(△)。参加者数は昨年並みだが、新規参加中学校有(○) ○23のクラブが始業前の地域清掃活動に輪番でほぼ毎日参加(◎) ○“写真でみる貝高生”をWebで毎月更新(○) ○広報用ポスター、チラシ等に写真同好会、書道部が協力(○)